

子どもの生活・意識の変化と学校教育 —「切目子ども調査」第二次報告—

梅 田 修 (教育学部)

は じ め に

本稿は、第二次切目調査(1986年3月)の一環として実施した「切目子ども調査」の報告である。第二次切目調査については、次の論稿でふれている。

- 1, 梅田修「住民の自立と教育」(『部落問題研究』第92輯, 部落問題研究所, 1987年10月)
- 2, 西滋勝・梅田修「和歌山の教育調査—第二次切目調査報告」(『部落問題研究』第94輯, 部落問題研究所, 1988年3月)
- 3, 梅田修「格差について」(『部落』第512号, 部落問題研究所, 1989年8月)

第二次切目調査が示したことは、「就業」と「学歴」についていえば、A地区(同和地区)はB地区(隣接する一般地区)と比較して、中高年層においては10年以上の「学歴」の遅れや不安定就労層の比率の高さが認められるが、20歳代を中心に常雇労働者の増大と学歴の急激な上昇という事実が認められるということであった。このことは、「旧身分差別にもとづく歴史的な傷跡」の克服過程が、A地区においても着実に進行していることを示すものである。そしてまた、こうした青年層にみられる前進的傾向が、A地区における部落問題解決に見通しを与えるものとなっている。

しかし、「切目子ども調査」において、子ども(小学生・中学生)の教育を規定する諸条件を検討していくと、あらためて主として中年層をしめる親たちの問題(「学歴」の遅れや不安定就労)がクローズアップされてきたのである。この親たちの問題に注目し、子どもの教育を一方で規定している地域・家庭の生活基盤について分析したのが拙稿「子どもの教育と地域・家庭の生活基盤」(『部落問題研究』109輯, 部落問題研究所, 1991年1月)である。この論稿を「切目子ども調査」の第一次報告とすれば、本稿は、「切目子ども調査」の第二次報告としての位置づけにある。

I. 「切目子ども調査」の概要

(1)調査の目的

第一次切目調査が実施された時(1976年3月)は、特に子どもを対象とした調査は計画されなかった。第二次切目調査(1986年3月)の実施にあたって、子ども調査を独自に計画したのは、次のような趣旨からである。

第一は、同和教育の分野においても、「部落問題が提起する教育課題」の解決が着実に進行していることを事実として示すこと、すなわち、同和地区の子どもたちに独自の問題が見られるというよりも、子どもたちに顕在化している教育問題は同和地区内外で共通性が高まってきていること

を明らかにすることである。

しかし、この第一の点が明らかになったとしても、それは、子どもたちに現れている教育問題の解決の過程・程度を必ずしも示すものではなく、あくまでも教育問題の共通性・普遍性を指摘するにすぎない。したがって、第二に、同和地区内外で共通性が高まってきていると考えられる教育問題の所在を明らかにすることである。そして、それを次の二つの側面から切りこんでみたいということである。

イ. 今日の受験競争の激化を軸に顕在化する社会問題が、子どもの生活や価値意識にどのように反映しているのかということ。

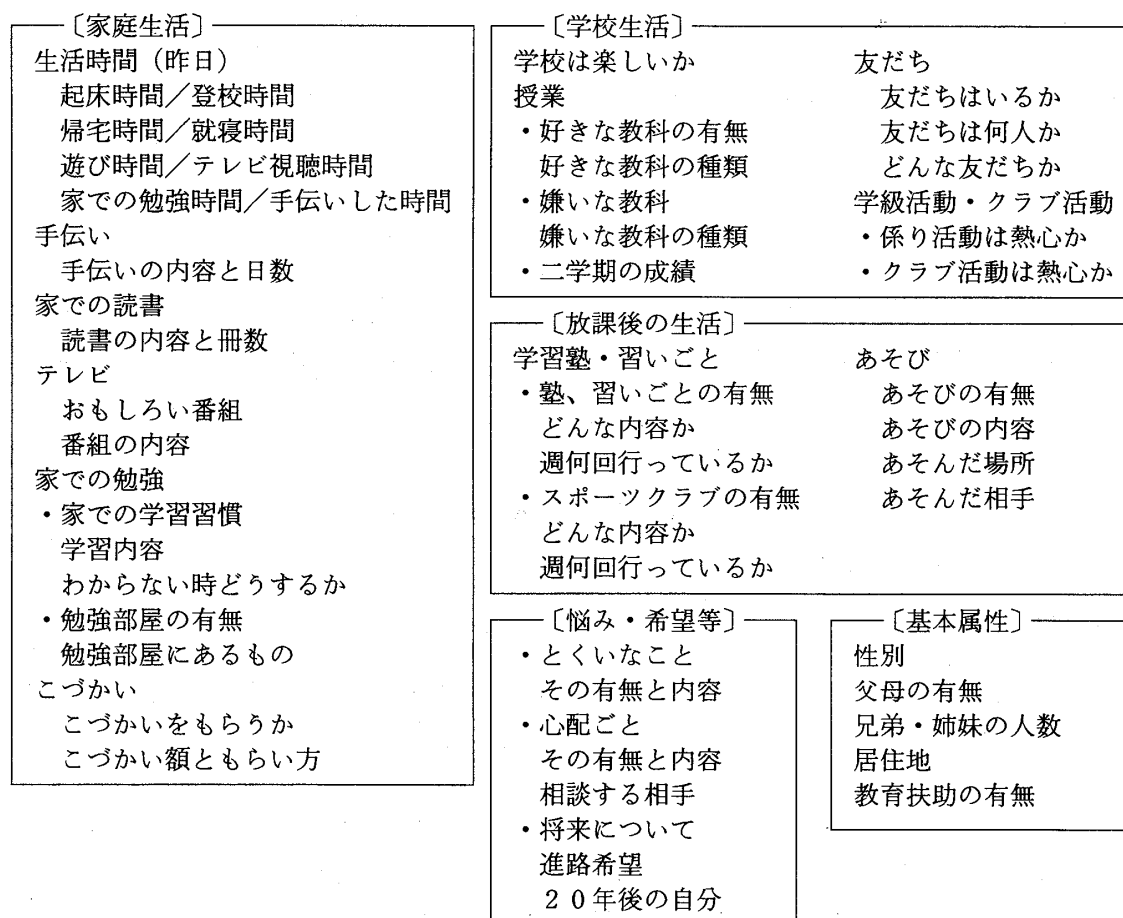
ロ. イの事態の進行が子どもとその家庭に及ぼす影響は、社会階層によってどのような違いがあるのか、特に生活困難層の子どもと家庭にどのように影響しているのかということ。

(2) 調査の内容・方法・対象

1. 調査内容

調査内容は、子どもの「基本属性」（性別、父母の有無、兄弟・姉妹の人数、居住地、教育扶助の有無）、子どもの生活時間の使い方（昨日）、放課後の生活、家庭生活、学校での生活、意識（将来への見通しなど）などから成っている。調査項目の概要は、図1の通りである。

図1 調査項目



2. 調査方法

調査は、上記の内容にもとづいて、質問紙法によって実施した（ただし、「基本属性」の中の「父母の有無、居住地、教育扶助の有無」の三項目については、教師に記入してもらった）。さらに、これを単年度調査にとどめず、同一内容の調査を小学校で二年間、中学校で三年間継続実施した。実施した年月は、次のとおりである。

1986年3月（第一次）——小学校・中学校

1987年3月（第二次）——小学校・中学校

1988年3月（第三次）——中学校

この継続実施には、二つの意味・ねらいがある。第一は、調査対象の人数が少ないことから、単年度調査の結果を一般的な傾向として論述するにはたいへん危険性が伴うということである。第二は、継続実施することで、文字どおり学年進行に伴う子どもの変化を見ることができるということである。なお、小学校も三年間の継続調査を予定していたのであるが、小学校の事情で三年目は実施できなかった。得られたデータの範囲で、この二つの意味・ねらいに留意することとした。

3. 調査対象

A地区・B地区の子どもが在籍する切目小学校の3～6年生、切目中学校の1～3年生が対象である。その人数は、表1のとおりである。なお、切目中学校区の小学校は切目小学校だけであり、したがって、子どもたちは同じ構成メンバーで（転出・転入は若干あるが）九年間を過ごしていることになる。

表1 調査人数

									(人)
		小 3	小 4	小 5	小 6	中 1	中 2	中 3	計
一九八六年	同 和 地 区	13	12	10	20	16	7	12	90
	同和地区外	21	26	26	21	28	31	25	178
	男	16	20	18	23	26	16	21	140
	女	18	18	18	18	18	22	16	128
	計	34	38	36	41	44	38	37	268
一九八七年	同 和 地 区	5	15	13	11	19	14	7	84
	同和地区外	17	22	26	26	24	29	33	174
	男	13	18	20	19	23	26	15	134
	女	9	19	19	18	20	17	22	124
	計	22	37	39	37	43	43	37	258
一九八八年	同 和 地 区	—	—	—	—	11	16	15	42
	同和地区外	—	—	—	—	25	26	25	76
	男	—	—	—	—	17	21	22	60
	女	—	—	—	—	19	21	18	58
	計	—	—	—	—	36	42	40	118

1) 同和地区—A地区の子ども、同和地区外—A地区以外（B地区をふくむ）の子ども

II. 子どもの生活と意識①—全体的特徴

まず、子どもたちの生活・意識の全体的な特徴について、生活時間と生活領域（学校生活・家庭生活・放課後の生活）ごとに検討する。なお検討にあたっては、次の方法をとった。

1. 調査人数が限定されていることから、一定の傾向を見るために、小学校中学年（小学校3・4年生，以下「小中」）・小学校高学年（小学校5・6年生，以下「小高」）・中学生（中学校1・2・3年生，以下「中学」）に区分する。
2. 基本的には小学校・中学校で実施した2年間（1986年・1987年）の結果にもとづいて検討をおこない，必要に応じて1988年の中学校調査にふれることとする。

（1）生活時間

子どもの生活時間のうち調査したのは，「起床時間」「登校時間」「帰宅時間」「就寝時間」「遊び時間」「テレビ視聴時間」「家での勉強時間」「手伝いした時間」の八項目である。いずれも，調査日前日（昨日）の時間を質問している。

1. 起床時間・登校時間・就寝時間

「起床時間」「登校時間」とも，1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。小学生の90％程が「6時30分～7時30分」に起床し，「7時30分～8時」の間に，小中（1986-65.3%，1987-68.7%），小高（1986-77.9%，1987-61.8%）が登校している。中学生の場合は，「7時～7時30分」の起床をピークとしつつも（1986-54.6%，1987-53.7%），起床が全体として遅くなっており，登校も「7時45分～8時15分」に集中している（1986-75.6%，1987-86.2%）。中学生ほど朝の時間があわただしくなっている。

「就寝時間」は，小学生→中学生としたいに遅くなる傾向にある。夜11時以降の就寝は，小中（1986-5.6%，1987-0%），小高（1986-5.2%，1987-23.7%），中学（1986-49.6%，1987-39.0%）である。

（註）以下の叙述の中で（ ）内に％が二つ記入されている場合は，前者が1986年，後者が1987年のものである。

2. あそび時間・テレビ視聴時間・家での勉強時間

「起床時間」「登校時間」「就寝時間」は，基本的な生活習慣に関連した生活時間であるが，「あそび時間」「テレビ視聴時間」「家での勉強時間」は，子どもの意志（自覚）が直接反映されやすい生活時間である（表2）。

「あそび時間」（屋内・屋外を問わない）は，1986年と1987年の傾向が異なる。1986年は小中がやや長く，1987年は中学が長い。もっとも，これは「あそんだ」子どもの時間なので，後でみるように，どれほどの子どもが日常遊んでいるのかという点と関わって評価する必要がある。

「テレビ視聴時間」は，1986年と1987の傾向がやや異なるが，全体としてみれば小学生→中学生

表2 生活時間（昨日）（％）

		選 択 肢	小中	小高	中学
あそび時間	1986	0 — 30分	54.2	76.6	68.1
		30— 60分	6.9	18.2	18.5
		60—120分	18.1	2.6	5.9
		120分以上	20.8	2.6	7.6
	1987	0 — 30分	76.3	73.7	53.7
		30— 60分	13.6	9.2	22.8
		60—120分	6.8	14.5	10.6
		120分以上	3.4	2.6	13.0
テレビ視聴時間	1986	0 — 30分	23.6	18.2	16.8
		30— 60分	23.6	23.4	16.8
		60—120分	34.7	29.9	33.6
		120分以上	18.1	28.6	32.8
	1987	0 — 30分	27.1	27.6	10.6
		30— 60分	42.4	32.9	12.2
		60—120分	20.3	31.6	33.3
		120分以上	10.2	7.9	43.9
家での勉強時間	1986	0 — 30分	36.1	11.7	36.1
		30— 60分	31.9	31.2	22.7
		60—120分	18.1	48.1	17.6
		120分以上	13.9	9.1	23.5
	1987	0 — 30分	6.8	5.3	26.8
		30— 60分	49.2	17.1	30.1
		60—120分	30.5	50.0	28.5
		120分以上	13.6	27.6	14.6

と長くなっている。中学で「120分以上」の比率が高い（32.8%，43.9%）。なお、小高の「120分以上」が1986年→1987年で減少していることは注目される（28.6%，7.9%）。

「家での勉強時間」は、1986年と1987年の傾向がやや異なる。小中・小高とも、1986年→1987年と長くなっている。特に小高は1987年で長くなっており、中学を上回っている。中学は長いものもあるが、「60分以下」の比率も高い（58.8%，56.9%）。

このように、「あそび時間」「テレビ視聴時間」「家での勉強時間」については、「起床時間」「登校時間」「就寝時間」とは異なって、学年の進行（小中→小高→中学）に伴って一定の傾向が強まっていくとは必ずしもいえない。これらの生活時間を規定する要因が多様に存在することをうかがわせる。この点は、後述する。

（2）学校生活

学校生活の関連項目を示したのが、表3である（表では、選択肢の一部とそれに対する回答を省いている）。

1. 学校は楽しいか

「学校は楽しいか」は、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である（表では、選択肢の「ふつう」「不明」を省いている）。小中と小高はほぼ同じ比率であるが、中学で「楽しい」が激減している（25.4%，27.0%）。だからといって、中学で「楽しくない」が増加しているかというところでもなく、結局「ふつう」と感じる子どもが多いということである（56.8%，54.9%）。小中・小高とも、「楽しい」が1986年→1987年と増加していることは注目される。

2. 好きな教科・嫌いな教科

「好きな教科」「嫌いな教科」については、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である（表では、選択肢の「不明」を省いている）。

「好きな教科」は、小中と小高はほぼ同じ比率であるが、中学で「ない」が増加している。特に、1987年の「ない」の比率が高い。「嫌いな教科」が

「ある」は学年によって大きな相違はないが、「ない」は小中→小高→中学としだいに減少している。

3. 学級の係り活動

「学級の係り活動」も、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である（表では、選択肢の「熱心」と「まあまあ熱心」の二つをあわせて「熱心なほう」とし、「ふつう」「不明」を省いている）。小中と小高はほぼ同じ比率であるが、中学で「熱心なほう」が激減している。ここでも、中学で「ふつう」と答える子どもの比率が高い（69.4%，54.5%）。

表3 学校生活

		（%）			
		選 択 肢	小中	小高	中学
楽しいか	1986	楽しい	39.1	41.6	25.4
		楽しくない	11.6	9.1	11.0
	1987	楽しい	55.9	48.7	27.0
		楽しくない	3.4	5.3	10.7
好きな教科	1986	ある	92.9	88.3	78.8
		ない	1.4	2.6	9.3
	1987	ある	96.6	94.7	56.9
		ない	1.7	1.3	23.6
嫌いな教科	1986	ある	77.1	85.5	83.9
		ない	17.1	10.5	6.8
	1987	ある	82.8	82.9	87.0
		ない	13.8	9.2	4.1
係り活動	1986	熱心なほう	54.7	50.0	18.4
		あまり	3.1	8.3	9.2
	1987	熱心なほう	58.5	50.0	22.2
		あまり	9.4	5.3	19.2
成績	1986	よいほう	27.9	11.7	15.1
		悪いほう	29.4	45.5	45.4
	1987	よいほう	20.7	20.0	9.2
		悪いほう	27.6	34.7	49.6

4. 二学期の成績

「二学期の成績」は、1986年と1987年の傾向はやや異なっている（表では、選択肢の「よい」と「少しよい」の二つをあわせて「よいほう」、「少し悪い」と「悪い」の二つをあわせて「悪いほう」とし、「ふつう」「不明」を省いている）。1986年は、小高と中学がほぼ同じ比率で、「悪いほう」が45%程に達している。1987年は、「悪いほう」が小中→小高→中学としだいに増加し、中学で49.6%に達している。1986年→1987年に見られる小高の変化が注目される。

(3) 放課後の生活

放課後の生活の関連項目を示したのが、表4である（表では、選択肢の一部とそれに対する回答を省いている）。

1. 学習塾・習いごと

「学習塾・習いごと」は、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。「通っている」が、小中→小高→中学としだいに減少している。この表は、「学習塾」と「習いごと」をまとめて集計しているが、これを区別した場合どういう傾向がみられるのか。表5は、「学習塾」とこの地域の「習いごと」の代表的なものである「そろばん」を学年別にとりだしたものである。

これによると、「学習塾」は、1986年・1987年とも小5の20%程が通いはじめ、小6～中学とどの学年も60%以上が通っている。これに対し、「そろばん」は、1986年・1987年とも小3～小5は

表4 放課後の生活

		選 択 肢	小中	小高	中学
塾 な ど	1986	通っている	80.1	77.9	52.9
		通っていない	19.9	22.1	47.1
	1987	通っている	83.1	72.4	63.4
		通っていない	16.9	27.6	36.6
ス ポ ー ツ ク ラ ブ	1986	通っている	49.3	41.3	6.0
		通っていない	50.7	58.7	94.0
	1987	通っている	55.1	43.5	3.5
		通っていない	44.9	56.5	96.5
あ そ び	1986	毎日・時々 遊んでいない	90.0	75.3	65.0
			10.0	24.7	35.0
	1987	毎日・時々 遊んでいない	86.0	65.8	39.7
			14.0	34.2	60.3

表5 学習塾・そろばん

		(%)			
学 年		1986		1987	
		学習塾	そろばん	学習塾	そろばん
小 3		13.3	83.3	0.0	75.0
小 4		3.6	78.6	9.1	81.8
小 5		29.0	90.3	20.8	83.3
小 6		62.1	37.9	87.1	80.6
中 1		69.2	34.6	71.9	9.4
中 2		71.4	25.0	65.5	24.1
中 3		66.7	0.0	82.4	0.0

表6 あそびの種類（上位三位）

		(%)	
小 中	1986年	1. テレビゲーム等	36.5
		2. サッカー	30.2
		3. その他	25.4
	1987年	1. その他	40.8
小 高	1986年	2. サッカー	38.8
		3. トランプ・将棋	36.7
	1987年	1. テレビゲーム等	40.8
中 学	1986年	2. おしゃべり	36.7
		3. 自転車乗り	34.7
	1987年	1. テレビゲーム等	47.9
	1986年	2. その他	27.1
		3. おしゃべり	27.1
	1987年	1. テレビゲーム等	27.1

75%以上の子どもが通っているが、1986年の小6（37.9%）、1987年の中1（9.4%）から激減している。このように、「習いごと」は小学生が中心であり、「学習塾」は小6から急増し、中学生が中心にである。この地域では、小6がこの転換の節目となっている。

2. スポーツクラブ

「スポーツクラブ」は、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。小学生ではほぼ半数の子どもが通っているが、中学生ではほとんどの子どもが通っていない。小学生の「スポーツクラブ」は、学年によって異なるが、「野球」「バレー」「剣道」「柔道」の四つがほとんどである。

3. あそび

「あそび」は、調査時点までの一週間の様子を聞いたものである（表では、選択肢の「毎日」「時々」の二つをあわせている）。1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。小中→小高→中学としたいに「毎日・時々」が減少しているが、1987年の中学の減少が顕著である。「遊んでいない」は、1987年の中学で60.3%に達する。

仮に「遊んでいる」にしろ、その内容が問題となる。表6は、遊びの内容（複数回答）を上位三位まで示したものである。調査時点が3月だということを考えあわせても、「テレビゲーム等」「おしゃべり」といった内容が、すでに小高からあそびの中心になっていることが注目される。

(4) 家庭生活

家庭生活は、「手伝い」「家での勉強」「家での読書」「テレビ視聴」「こづかい」などについて質問しているが、ここでは「家での勉強」に限定して検討する（表7）。他の項目は、特に特徴的な傾向はみられなかった。

「家での勉強」は、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。「毎日している」の比率が小中と小高で高く（1987年の小高は全員）、中学で激減している。中学では「時々」が増加し、「していない」子どもも一定の比率で存在している。

「勉強がわからない時どうしたか」（複数回答）は、1986年と1987年の傾向はほぼ同様である。「家の人に聞く」が小学生→中学生と激減するのは、学習の内容が難しくなることとも関係があろう。「友だちに聞く」が小中→小高→中学としたいに増加している。また、「参考書・辞書を見る」が中学で急増するのは、自主的な学習態度が形成されてきたことの一定の反映ともいえるし、「家の人に聞く」ことが困難だとすれば、とりあえずは参考書・辞書に頼らざるをえないことの結果でもあろう。問題なのは、「そのままにしておく」である。中学で増加し、ほぼ5人に1人（22.4%、22.1%）となっている。

表7 家庭学習

		(%)			
		選 択 肢	小中	小高	中学
家 で の 勉 強	1986	毎 日	80.6	79.2	47.5
		時 々	16.4	18.2	44.1
		していない	3.0	2.6	8.5
	1987	毎 日	84.7	100	35.0
		時 々	13.6	0.0	50.4
		していない	1.7	0.0	14.6
わ か ら な い 時	1986	家 の ひ と	77.4	61.3	18.7
		友 だ ち	3.2	12.0	14.0
		参考書など	6.5	10.7	56.1
		そのまま	12.9	10.7	22.4
	1987	家 の ひ と	72.4	67.1	23.1
		友 だ ち	1.7	11.8	24.0
		参考書など	12.1	18.4	44.2
		そのまま	6.9	6.6	22.1

(5)子どもの生活・意識と学校教育

子どもの生活・意識の特徴を小中・小高・中学別にみてきたが、当然のこととして、小中→小高→中学と子どもの生活・意識は変化している。だが、この変化は単純ではない。子どもの成長に伴って当然予想される変化（たとえば、「就寝時間」がしだいに遅くなる）ということでは、説明できない事態が進行しているのである。それは、次のような事態である。

第一は、小学生→中学生にしたがって、子どもの生活・意識が学校教育や受験競争への対応を中心に展開されていることである。

子どもたちの「放課後の生活」の変化が、その象徴である。小学6年生を節目にして、小学生の「習いごと」は「学習塾」へと転換している。小学生の約半数が通っていた「スポーツクラブ」は、中学生のほとんどが通っていない。屋内にしる屋外にしる、「遊んでいない」中学生は、1987年で60%を越えている。中学生にとって、「放課後の生活」はきわめて貧しい。

第二は、それにも関わらず、子どもたちの学校教育への評価・思いは、必ずしも肯定的には推移していないということである。

学校を「楽しい」と感じるのは中学生で激減し、「好きな教科」が「ない」が中学生で増加し、「嫌いな教科」が「ない」は小学生→中学生としだいに減少している。また、「学級の係り活動」が「熱心なほう」は中学生で激減している。「二学期の成績」が「悪いほう」と考えるのは、小学生→中学生としだいに増加している。久富善之が指摘した、子どもたち自身の「学校と学校における自分とに対する否定的自己評価の学年上昇に伴う系統的増大」（久富善之『現代教育の社会過程分析』労働旬報社、1985年、116頁）という事態は、ここでも若干形を変えて進行している。

第三は、こうした事態は、学校教育や受験競争への対応から「落ちこぼれていく」子どもたちをも生みだしながら進行しているということである。

「家での勉強」を「毎日している」が中学生で激減し、「していない」中学生が1987年で14.6%存在している。また、「勉強がわからない時」に「そのままにしておく」中学生は、ほぼ5人に1人存在する。「遊ばない」中学生が多い中で、「遊んでいる」中学生の「遊び時間」がやや長いのも、こうした事態と関連させて検討する必要があるかもしれない。

以上のように、子どもたちの生活・意識は、小学校から中学校へと進むにしたがって大きく変化している。この変化の意味することは、小学校・中学校という学校階梯上の区分（不連続）が、受験競争という社会的影響の中で、否定的不連続としての性格を強く持って作用しているということである。しかし、この否定的不連続という問題は、それほど単純ではない。このことを、学年の進行に即して、次に検討してみる。

Ⅲ. 子どもの生活と意識②—小学校・中学校の連続・不連続

小学校と中学校という学校階梯の区分が、子どもの生活の変化にどのように作用しているのかを検討することがここでの課題である。検討にあたって、次の方法をとった。

1. 小学校・中学校の連続・不連続の問題については、学年ごとの傾向に一定の特徴が存在することに着目し、学年を単位に検討をおこなう。
2. 1986年調査（第一次）の時点で、小学校5年生・6年生、中学校1年生であった子どもを対象とし、三年間（1986年～1988年）の変化を検討する。この三学年の子どものデータは三年間

分そろっている。

(1)生活時間

子どもの生活時間（昨日）のうちで、「起床時間」「登校時間」「帰宅時間」「就寝時間」「遊び時間」「手伝いした時間」については、全体的特徴で指摘した傾向がそのままあてはまる。問題は「テレビ視聴時間」と「家での勉強時間」である（表8）。

1. テレビ視聴時間

「テレビ視聴時間」は、中1（1986年時点での中1—以下同様）はやや変動しているが、小5（1986年時点での小5—以下同様）・小6（1986年時点での小6—以下同様）は学年進行に伴って長くなるという傾向は見られず、三年間ともほぼ同様の比率で推移している。しかし、小5と小6は時間の長さが異なる。小5の「120分以上」は10%前後であるのに対し、小6の「120分以上」は30%～40%という高率を示すなど、全体として小6の時間が長いのが特徴的である。

2. 家での勉強時間

「家での勉強時間」は、小5は、1986年（小5）に最も多かった「60～120分」（69.4%）が、1987年（小6）・1988年（中1）には長短に分化している。小6は、小5と同様に、1986年（小6）に最も多かった「30～60分」（48.8%）が、1987年（中1）・1988年（中2）にはやや短い方に比重を高めながら長短に分化している。しかし、小5と小6は時間の長さが異なる。三年間とも、小5が小6をはるかに上回っているのである。中1は、1986年（中1）→1988年（中3）としだいに長くなっている。この「家での勉強時間」は昨日の時間であり、やや不安定な統計であるということもできる。この点については、家庭生活の他の項目を検討する際にふれる。

（註）表8は、1986年調査時点での学年を左欄に示し、その学年の変化を見るため、右欄に1986年調査・1987年調査・1988年調査時点での結果を示している。したがって、たとえば1986年時点で小学校5年生の場合、1987年の数字は小学校6年生としてのデータ、1988年の数字は中学校1年生としてのデータということになる。また、表の中では、選択肢の一部とそれに対する回答を省いている。その内容は、「II. 子どもの生活と意識①—全体的特徴」で説明した通りである。以下の表も同様である。

表8 生活時間（昨日）

(%)

		選 択 肢	1986	1987	1988
テ レ ビ 視 聴 時 間	小 5	0 — 30分	25.0	43.2	25.0
		30— 60分	25.0	24.3	33.3
		60—120分	38.9	24.3	27.8
		120分以上	11.1	8.1	13.9
	小 6	0 — 30分	12.2	13.9	14.3
		30— 60分	22.0	11.6	9.5
		60—120分	22.0	39.5	33.3
		120分以上	43.9	34.9	42.9
	中 1	0 — 30分	29.5	7.0	27.5
		30— 60分	29.5	16.3	15.0
		60—120分	27.3	27.9	30.0
		120分以上	13.6	48.8	27.5
家 で の 勉 強 時 間	小 5	0 — 30分	2.8	5.4	19.4
		30— 60分	11.1	13.5	13.9
		60—120分	69.4	45.9	41.7
		120分以上	16.7	21.6	25.0
	小 6	0 — 30分	19.5	39.5	40.5
		30— 60分	48.8	23.3	33.3
		60—120分	29.3	25.6	23.8
		120分以上	2.4	11.6	2.4
	中 1	0 — 30分	61.4	25.6	17.5
		30— 60分	22.7	37.2	22.5
		60—120分	11.4	25.6	32.5
		120分以上	4.5	11.6	27.5

(2) 学校生活

学校生活の関連項目を示したのが、表9である。
「嫌いな教科」は、特徴的な傾向がみられず省いた。

1. 学校は楽しいか

「学校は楽しいか」は、中1の1988年(中3)で「楽しい」が増加している以外は、小5・小6・中1とも、三年間の比率がほぼ一定している。小5・小6とも中学での「落ちこみ」という事態はみられない。しかし、小5と小6の相違がきわだっている。「楽しい」は、小5が52.8%→56.8%→50.0%と50%以上であるのに対し、小6は31.7%→27.9%→28.6%と低く、三年間とも20%程の差がある。

2. 好きな教科

「好きな教科」は、小5は、三年間を通して「ある」がほとんどで、「ない」は1987年・1988年で各1人である。中学での「落ちこみ」という事態はみられない。逆に小6は、「ない」が1987年(中1)で増加し、1988年(中2)には33.3%に達している。中1は、1987年(中2)から「ない」がやや増加している。

3. 学級の係り活動

「学級の係り活動」は、小5は、1988年(中1)でやや低下するものの、「熱心なほう」の比率は三年間を通して高く(54.5%→64.9%→41.1%)、「あまり」は1987年・1988年で各1人である。中学

での「落ちこみ」という事態はみられない。逆に小6は、1987年(中1)に「熱心なほう」が激減し、「あまり」も1986年(小6)から一定の比率(15%以上)で存在している。中1は、「熱心なほう」も「あまり」も、三年間を通してほぼ20%前後で推移している。

4. 二学期の成績

「二学期の成績」は、小5の1987年(小6)を除いて、小高から「悪いほう」が40%以上の比率で存在していることが特徴的である。小5の1988年(中1)・小6の1987年(中1)にみられるように、中学1年生でやや「悪いほう」が増加する傾向にある。中1は1986年(中1)→1988年(中3)と「悪いほう」がやや減少傾向にある。

(3) 放課後の生活

放課後の生活の関連項目を示したのが、表10である。ここでは、学年による相違はほとんど見られない。

表9 学校生活

(%)

	1986	選択肢	1986	1987	1988
学校 楽しい か	小5	楽しい	52.8	56.8	50.0
		楽しくない	5.6	8.1	5.6
	小6	楽しい	31.7	27.9	28.6
		楽しくない	12.2	9.3	14.3
	中1	楽しい	22.7	21.4	45.0
		楽しくない	13.6	21.4	7.5
好 きな 教 科	小5	ある	94.4	89.2	94.4
		ない	0.0	2.7	2.8
	小6	ある	82.9	69.8	54.8
		ない	4.9	20.9	33.3
	中1	ある	81.8	58.1	65.0
		ない	4.5	16.3	12.5
係 り 活 動	小5	熱心なほう	54.5	64.9	41.1
		あまり	0.0	2.7	2.9
	小6	熱心なほう	46.2	16.2	28.9
		あまり	15.4	21.6	15.8
	中1	熱心なほう	18.8	28.6	26.7
		あまり	15.6	22.9	23.3
二 学 期 成 績	小5	よいほう	13.9	25.0	2.8
		悪いほう	47.2	22.2	52.8
	小6	よいほう	9.7	13.3	14.2
		悪いほう	43.9	52.4	52.4
	中1	よいほう	20.5	9.3	10.0
		悪いほう	56.8	48.8	45.0

1. 学習塾・そろばん

「学習塾・そろばん」は、「そろばん」に通う小5の比率がやや高いものの、小学6年生から「学習塾」が60%以上となり、「そろばん」が中学1年から激減するという全体的特徴は小5・小6ともあてはまる。中1では、「学習塾」「そろばん」ともやや減少傾向にある。

2. スポーツクラブ

「スポーツクラブ」は、「学習塾・そろばん」以上に傾向ははっきりしている。小5の1988年（中1）・小6の1987年（中1）から、「通っている」が数人となるなど、中学で激減している。中1も、三年間を通して数人である。

3. あそび

「あそび」も、小5・小6とほぼ同様の傾向である。小5の1988年（中1）・小6の1987年（中1）から、「遊んでいない」が50%以上となっている。すなわち、中学になって「遊んでいない」が急増しているのである。なお、中1には一定の傾向はみられない。

(4)家庭生活

すでに述べたように、家庭生活については、家庭学習に限定してふれることとする（表11）。

1. 家での勉強

「家での勉強」は、小5は、三年間を通して「毎日している」がほとんど（94.4%→100.0%→91.4%）で、「していない」は1人もいない。中学での「落ちこみ」という事態はみられない。小6は、1987年（中1）の変化が大きい。すなわち、「毎日」が激減し、「していない」が27.9%に達する。中1は、「していない」層を一定の比率でふくみつつも、「毎日」が漸増している。ここでも、特に小5と小6の相違がきわだっている。前述した「家での勉強時間」における小5と小6の相違は、こうした事態の反映と言えよう。

2. 勉強がわからない時どうしたか

「勉強がわからない時どうしたか」（複数回答）は、小5・小6とも、「家の人に聞く」がしだいに

表10 放課後の生活

		(%)			
	1986	選 択 肢	1986	1987	1988
塾・そろばん	小5	学 習 塾	29.0	87.1	83.8
		そ ろ ば ん	90.3	80.6	36.7
	小6	学 習 塾	62.1	71.9	85.2
		そ ろ ば ん	37.9	9.4	11.1
	中1	学 習 塾	69.2	65.5	50.0
		そ ろ ば ん	34.6	24.1	12.5
スポーツクラブ	小5	通っている	41.7	22.6	6.1
		通っていない	58.3	77.4	93.9
	小6	通っている	41.0	5.1	0.0
		通っていない	59.0	94.9	100
	中1	通っている	9.3	5.1	1.0
		通っていない	90.7	94.9	100
放課後の遊び	小5	毎日・時々遊んでいる	75.0	70.3	47.2
		遊んでいない	25.0	29.7	52.8
	小6	毎日・時々遊んでいる	75.6	46.3	31.0
		遊んでいない	24.4	53.7	69.0
	中1	毎日・時々遊んでいる	68.2	46.5	80.0
		遊んでいない	31.8	53.5	20.0

表11 家庭学習

		(%)			
	1986	選 択 肢	1986	1987	1988
家で勉強	小5	毎 日	94.4	100	91.4
		時 々	5.6	0.0	9.6
		していない	0.0	0.0	0.0
	小6	毎 日	65.9	18.6	38.1
		時 々	29.3	53.5	54.8
		していない	4.9	27.9	7.1
わからな	中1	毎 日	27.3	34.9	50.0
		時 々	63.9	55.8	40.0
		していない	9.1	9.3	10.0
	小5	家のひと友だち参考書などそのまま	75.0	64.9	45.7
		友 だ ち	8.3	24.3	42.9
		参考書など	8.3	18.9	45.7
い	小6	家のひと友だち参考書などそのまま	2.8	5.4	8.6
		家 の ひ と	48.7	38.7	25.6
		友 だ ち	15.4	22.6	10.3
	中1	参考書など	12.8	38.7	48.7
		そ の ま ま	17.9	25.8	28.2
		家 の ひ と	25.6	15.4	20.6
時	小5	友 だ ち	20.5	23.1	26.5
		参考書など	53.8	43.6	41.2
		そ の ま ま	15.4	30.8	20.6

減少し、「参考書・辞書を見る」が特に中学になって急増している。これらは、学習状況（学習内容の難易度など）に対する子どもの対応の変化ということができよう。中1は、三年間を通してほぼ同様の傾向である。

しかし、問題は「そのままにしておく」である。小5は、三年間を通して数人にとどまっているのに対し、小6は、しだいに増加して1988年（中2）で28.2%に達している。中1は、一定の比率で存在している。ここでも、小5と小6の相違がきわだっている。

（5）子どもの生活・意識と学校階梯

1986年調査の時点で、小5・小6・中1であった子どもの三年間の変化を見てきた。その結果、小学校から中学校への過程で、子どもの生活・意識に大きな変化が起こっていることがあらためて明らかとなった。その変化の側面は、次の三つに区分される。

第一は、小学生から中学生にかけて、急激な変化が生じているという側面である。いわば、小学生から中学生の「断絶（飛躍）的变化」ともいえる事態である。

第二は、小学生から中学生にかけて、ほとんど変化していないという側面である。いわば、小学生から中学生への「継続的变化」ともいえる事態である。

第三は、小学生から中学生にかけて、しだいに一定の変化が起こっているという側面である。いわば、小学生から中学生への「漸次的変化」ともいえる事態である。

1. 「断絶（飛躍）的变化」

小学生から中学生にかけて、小5・小6・中1の三学年に関係なく、共通して「断絶（飛躍）的变化」ともいえる変化が生じているのは「放課後の生活」である。そろばんに代表される「習いごと」は中学から激減し、かわりに小6から「学習塾」が登場する。「スポーツクラブ」へ「通っている」は、中学でほとんどいなくなる。放課後に「遊んでいない」子どもは、中学で急増する。中学生において、放課後の生活が消滅しつつあるとも言えるのである。

2. 「継続的变化」と「漸次的変化」

小学生から中学生にかけての「継続的变化」と「漸次的変化」は、項目によって学年の現れ方が異なっている。表12は、(1)～(4)でとりあげた項目（「放課後の生活」の関連項目を除く）ごとに、二つの学年（小5・小6）の変化の側面を概括したものである（「継続」「漸次」という区分で分類するほど明確でない場合もあるが、一応の傾向を見るために整理したものである）。

この表でも明らかなように、特徴の第一は、多くの項目において小5と小6の間に顕著な差がみられることである。顕著な差が見られないのは、わずかに「二学期の成績」（この項目も差がないと言っていいかどうか検討を要するが）と「勉強がわからない時」の選択肢「参考書・辞書を見る」である。

第二は、小5のほとんどの項目で、いわゆる中学での「落ちこみ」という事態が見られないとい

表12 小5・小6の比較

生活項目	小5	小6	学年差
テレビ視聴時間	継続	継続	○
家での勉強時間	漸次	漸次	○
学校は楽しいか	継続	継続	○
好きな教科	継続	漸次	○
学級の係り活動	継続	漸次	○
二学期の成績	漸次	漸次	×
家での勉強	継続	漸次	○
わからない時			
参考書・辞書	漸次	漸次	×
そのまま	漸次	漸次	○

※学年差（○－差がある、×－差がない）

うことである。

「テレビ視聴時間」「家での勉強」「学校は楽しいか」「好きな教科」「学級の係り活動」は、1986年からの三年間ほぼ同じ比率で推移している。「勉強がわからない時」の選択肢「そのままにしておく」も、やや増加はしているものの（漸次的変化）、数人にとどまっている。「家での勉強時間」は、1986年（5年）の状況が長短にしないで分化しているもので、「落ちこみ」とはいえない。唯一「二学期の成績」が、1987年（小6）で回復しているものの1988年（中1）で「落ちこみ」の傾向が見られる。

これに対して、小6の「好きな教科」「学級の係り活動」「家での勉強」「勉強がわからない時」の選択肢「そのままにしておく」において、中学での「落ちこみ」とその固定化という傾向が見られる。「家での勉強時間」は、1986年（小6）の状況が短い方に比重を高めながら分化しており、「二学期の成績」も、中学で「悪いほう」がやや増加の傾向にある。

第三は、中1には三年間急激な変化は起こっていないが、だからといって生活・意識が固定化されているとも言えないことである。多くの項目で学年による変動が大きい、「家での勉強時間」はしだいに長くなる傾向にあるし、「家での勉強」では「毎日」が増加している。これらは、受験勉強の反映とも言えないこともないが、「学校が楽しいか」の「楽しい」が1988年（中3）で増加しているなど、それだけでは説明できない傾向も存在している。

お わ り に

「切目子ども調査」を手がかりに、子どもの生活・意識の変化と学校教育との関わりを検討してきた。その結果、小学校・中学校という学校階梯上の区分（不連続）が、受験競争という社会的影響の中で、否定的不連続としての性格を強く持って作用していることが特徴的に示された。

今日、とりあえず小学校・中学校という学校階梯を前提として論ずるとすれば、この否定的不連続を肯定的不連続に転化させる条件・基盤は何かということが問題となろう。この点に関して、小5・小6・中1の三年間の変化の検討から、次のような点を仮説的に指摘することができよう。

第一は、小5にみられる傾向から指摘しうることである。小5では、それまでに子どもたちの多くがもちえた学校への肯定的評価（学校が「楽しい」、「好きな教科」が「ある」、「学級の係り活動」が「熱心なほう」）が、中学校へと継続しているということである。また、それまでに子どもたちの多くが獲得した家庭での学習習慣（「家での勉強」は「毎日」、「勉強がわからない時」は「そのまま」にしない）も、中学校へと継続している。

いったん形成された学校への肯定的評価は、それにふさわしいとりくみが支えにあって継続されるということは当然であり、このことを前提としつつ、小学校高学年までの「学校への肯定的評価」と「家庭での学習習慣の形成」が否定的不連続の克服を検討する場合の一つの焦点だということができる。

第二は、小6がそうであるように、学校への肯定的評価や学習習慣が不十分にしか獲得されていない場合は、中学で「落ちこみ」やすくなっているということである。なぜ中学で「落ちこむ」のであろうか。また、「落ちこみ」を促進しているのは何であらうか。こうした点の解明が、学校階梯の不連続を意味ある不連続（肯定的不連続）へと転換させていく内容の吟味につながるはずである。

今回の調査からこうした点を検討することは困難であるが、次のようなことは留意すべき事柄と

して指摘できよう。

一つは、小6から60%以上が「学習塾」に通うなど、受験競争がしだいに浸透してくる中で、成績を軸にして子どもたちが序列化されていっているのではないかということである。「二学期の成績」の自己評価が概して「悪いほう」に傾斜していくのは、こうした事態の反映ではないか。

二つは、「放課後の生活」に象徴されるように、中学生の生活が学校的価値を中心とした生活へと転換していく中で、自らの生き方を探求しうる多様な価値との出会いが貧しくさせられているのではないかということである。放課後の「あそび」の貧しさも、これに拍車をかけているのではないか。

小学校から中学校への否定的不連続の克服という課題は、今日の学校教育がかかえる問題の一つである。本稿が、教育調査（限られた対象と限られた設問による）を通しての検討であることに留意しつつ、他の方法にも配慮した引き続きの検討が必要となろう。他日を期する。